

## 平成 29 年度の 5 大ニュース

今年度も残すところあとわずか、1 年を振り返り、おもな活動をひろってみました。

① かけがわっ子ひろばのスタッフを 2 人から 3 人へと増員しました。



② 筍まつりを、はじめて定光寺公園を会場に行いました。



③ かけがわっ子ひろばでジョン・ギヤスライトさんによるツリークライミング教室を行いました。

地域の方からの焼き芋の差し入れもありました。



④ 掛川マップを使った「ふるさと探訪ウォーキング」を行いました。



⑤ 水野金光さんの絵をもとにした絵はがきを作り、2,200 枚以上を頒布しました。



### 年度末から年度始めにかけての予定

総務会	3月 2日 (金)
役員会	3月 8日 (木)
運営委員会	3月 22日 (木)
総務会 (新メンバー)	4月 5日 (木)
役員会 (新メンバー)	4月 13日 (金)
運営委員会 (新メンバー)	4月 19日 (木)
筍まつり	4月 22日 (日)
平成 30 年度総会	5月 12日 (土)

## 「せとまち地域活動大交流会」に参加して

平成29年11月24日（金）から12月19日（火）にかけて「子育て支援」「防災」「防犯」「高齢者支援・お助けたい」「環境美化・マナー」「地域コミュニティ・交流等」「広報」のテーマで7回交流会が開催され、それぞれに参加しました。そのテーマのひとつ「広報」の部では4グループに分かれ、各地区の広報の現状（発行回数、広報部員数、予算など）や記事の内容などの報告



広報活動の部（12/19）

と問題点を出し合い、これからの紙面づくり、取り組みについて話し合いました。各地区、いちばんの悩みは、広報部員のなり手や後継者がいないことでした。

## 筍まついの案内

日時 4月22日（日）  
午前9時より

会場 定光寺公園

地元産の筍をお値打ちに販売します。

次の日程で会場準備、筍掘りをします。地域の方で都合のつく方は是非ご協力ください。

筍掘り：4月21日（土）  
午前9時集合

下半田川町：町民会館

定光寺町：定光寺東バス停広場

筍袋詰め：4/22朝7時30分  
加藤令元さん車庫

会場作り：4/22朝7時30分  
定光寺公園 正伝池ほとりの東屋

## 金光さんの絵を活用した冊子づくりを検討しています

コミュニティーグループでは、掛川マップに使われている水野金光さんの絵の次なる活用について「ふるさと再発見」的な小冊子を作ってみてはとのアイデアがあがっています。

地域の皆さんから意見をいただくためのワークショップが昨年11月にもたれました。具体化に向けてこれから検討を進めていくことになりました。



ワークショップの様子（掛川公民館にて）

## 掛川小学校にこんなものがありました

掛川小学校の資料室に一風変わったアイロンがあります。炭火アイロンで、下半田川町の民家から教材用にと持ち込まれたものです。

中に炭火を入れて、その熱と本体の重さで布のしわをのばすためのアイロンです。

炭火を出し入れするために胴部が大きく高さもあり、上面が開閉できる蓋になっています。前方には煙突がつき、後ろには空気の取り入れ口があります。明治のころから昭和30年代まで使われていました。

## 炭火アイロン

炭火アイロンは温度調節がむづかしく時には布を焦がしてしまうようなこともあったのではないかと思われます。



逆L字形の煙突がついたもの



掛川小学校にあるもの



## 下半田川町に伝わる昔話 蛇ヶ洞の大蛇伝説

読者の皆さんからのご意見や要望の中に、地域に伝わる昔ばなしを紹介してほしいとの声がありました。

3回目の今回は下半田川町の蛇ヶ洞に伝わる伝説をとりあげました。  
(瀬戸市小中学校社会科研究会編「せとの昔ばなし」及び「尾張名所図会」を参考にしました。)

※1  
たいらのかげとも

昔々、品野の村に平景伴という人がおりました。勇気があり大変力の強い人でした。魚釣りが大好きで、毎日のように蛇ヶ洞川へ出かけたくさんの魚を釣って帰るのを自慢していました。ある日、景伴はいつものようにたくさん魚を釣って帰ってきました。かごの蓋を取って中をのぞいてみると、驚いたことに魚は一匹も見当たらず、笹の葉が何枚かかごの底にひっついていただけでした。「おかしいことがあるものだ」景伴はその夜はよく眠れませんでした。次の日も川へ出かけました。いつものようにたいそうよく釣れました。喜んで家に帰ってかごの蓋をとってみると、またびっくりしました。魚がみんな笹の葉に化けていたのです。

「これは何者かのしわざだろう」そう思いながら次の日、用心深く川で糸を垂れていますと、突然川上の方から生臭い風が強く吹いてきました。見ると大きな岩の上に一羽の白い鳩が羽を広げてバタバタ音を立てているではありませんか。景伴は「こいつが化け物の本当の姿だな」と思いながら鳩をにらみつけました。そのとき、「ポォーッ」とすごい音が出て白い煙があたり一面を覆いました。白い鳩の姿はもうそこにはなく、かわって大きな蛇が岩に体を巻き付けて、こちらをにらみつけているではありませんか。景伴は「ようし、この大蛇め、今にみておれ」とばかりに、用意してきた弓に矢をつがえ、力いっぱい引き絞って大蛇めがけて放つと、矢はビューと音をたてながら大蛇の額にぐさりと突き刺さり

ました。ドッと血を吹き出しながら大蛇は川に落ちましたが、苦しそうにもがきながらも景伴に襲いかかりました。景伴は「エイッ」とばかりに大蛇めがけて切りつけました。大蛇は頭をまっぴたつに切られ「ドォッ」という音とともに川の中に沈みました。

この様子を見ていた村の人々は「すごい大蛇だったのう」「さすが景伴さんは強いお人じゃ」「笹の葉を魚に変えていた化け物はこいつだったんだな」「よかったのう もう安心して釣りができるぞ」と、口々に話していました。その日から三日三晩、川は花のように赤く染まり、大蛇の骨も長く川底に残っていたということです。村には平和がおとすれ、だれ言うことなくこの川が流れる谷あいや蛇ヶ洞と呼ぶようになりました。

花のように染まった蛇ヶ洞の川は、そのうちに花川→半田川と呼び方が変わり、このあたりの土地の名前にもなったということです。

後々になって、この川は蛇ヶ洞川と呼ばれるようになり、町の中心部に架かっている橋は大蛇伝説にちなんで「花川橋」と命名されました。



稚児岩



稚児橋 (水野金光 画)

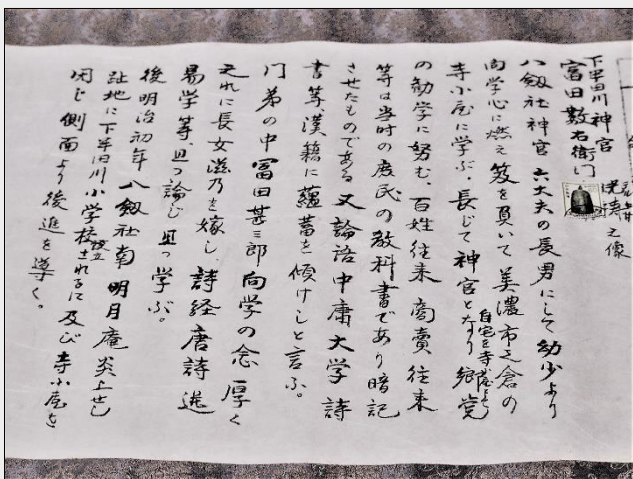
※1 平景伴：「戸田某」とか「長江氏なる人」などとなっている資料もある。

※2 大きな岩：品野村（当時）境にある蛇ヶ洞川左岸の稚児岩と呼ばれる巨岩（写真上）。稚児岩の稚児は大蛇の化身で、舞踏みをして人々をたぶらかしたという。後にこのすぐ近くの橋を稚児橋（挿し絵左）と命名した。

近くに蛇ヶ淵と呼ぶ深みがあり、景伴が釣りをしたのはまさにこの蛇ヶ淵であったと思われる。近年になって、蛇ヶ洞伝説の大蛇は昔からこの川に住むオオサンショウウオそのものではなかったかという人もいる。

## 掛川歴史散歩 沓掛学校下半田川分校

掛川小学校の校歌や校舎の話題はこの広報誌にかつて連載されましたが、今回は明治時代の下半田川における私塾（寺子屋）と下半田川分校を紹介します。



八剱社神官が下半田川分校開始まで寺子屋を開設

瀬戸市立掛川小学校は明治7年（1874）1月に、東明学校出張所が沓掛（現在の定光寺町）に開設された時が起源とされます。

平成26年（2014）に掛川小学校創立140周年行事があり、その時水野哲さんが100周年を記念して作成した「勧学夜明け前」という絵巻を見る機会がありました。

明治16年に下半田川分校が開設されるまで、筆者の先代、富田吉太郎（八剱社神官第8代）が自宅で私塾を開設していたことが記されていました。筆者が小学生の頃、自宅の神殿（母屋と別棟）を改築する時、塾生が使用していた簡素な文机を見た記憶があります。

下半田川村での私塾の記録は「勧学夜明け前」が唯一と思われます。門弟一名の名前が記されていますが、生徒数や開業年代は不明です。また富田數右衛門の名前は誤りで、六太夫の長男、自称焼僞（てるひさ）は吉太郎のことです。近隣の沓掛村や上半田川村などの私塾は『近世の瀬戸』に記録されています。

東明学校出張所から沓掛学校に変遷後、明治16年に下半田川分校が八剱社南方の庵の跡地に開設されました。自宅にある富田桂九郎（吉太郎の次男）の小学初等科第四級の卒業証は明治16年1月に沓掛学校下半田川分場（分校）から授与されています。

最近、水野仙三郎（水野敦士さんの曾祖父）の卒業証6点を見せてもらいました。明治16年12月の初等科第六級と第五級の卒業証は沓掛学校と、明治17年11月の第四級卒業証以降は下半田川学校と記載されています。明治16年に6歳の仙三郎は沓掛へ通学したのでしょうか。仙三郎はその後、明治19年6月に小学初等科第一級を、明治22年4月に小学簡易科を卒業しています。

明治30年に下半田川分校が廃止され、沓掛の観音堂跡地に新築された掛川尋常小学校（明治25年に沓掛学校から改名）へ下半田川の児童全員が通学することになりました。



「勧学夜明け前」に描かれた下半田川分校

下半田川分校での様子が「勧学夜明け前」に描かれています。教師は小幡、牧野、吉田、高坂先生で、高坂先生は児童の旧態依然の名前に代えて、明治政府高官の名に因んだ呼び名を与えました。富田恒さんの祖母（明治19年生まれ）も弟の守をしながら分校に通いました。（富田幹夫）



# 新春お年玉クイズの解答

今回のクイズはいかがだったでしょうか。とくに解答 3,4,5 に誤答が多かったです。過去の「やまびこ」にはこれらの解答につながる記事が載っていたはずですが…。

次の 1～5 の問題の答えとその解説はそれぞれ以下の通りです。

1 「元日」の意味は？

ウ 1 年の最初の日 言い換えれば 1 月 1 日のこと。

2 「元旦」の意味は？

ウ 1 年の最初の日朝 つまり 1 月 1 日の朝を意味します。

1 月元旦と年賀状に書く人がいますが、1 月が重なってしまうので間違った書き方です。

3 人の年齢が 1 歳ずつ繰り上がるのは次のどの日でしょうか。

イ 誕生日の前日

これは「年齢計算ニ関スル法律」と「民法」の二つの法律で定められています。誕生日に年齢が一つ増えると思っている人が多いですが、法律では日付が誕生日に変わる瞬間の前日の 24 時になった瞬間に 1 歳年が繰り上がるものと定められていて、年齢はあくまで誕生日の前日のうちに繰り上がるという解釈がなされているのです。

4 唱歌「もみじ」の 1 番の歌詞の中にでてくる「カエデやツタは…」のカエデと題名の「もみじ」は同じものを指していますか、それとも違うものですか。

イ 違うもの

「カエデ」はカエデ科の植物（イロハカエデ、ハウチワカエデなど）の総称で、どれも赤や黄色に紅葉します。「もみじ」は山が紅葉した様子または紅葉した葉のことをいい、漢字では紅葉と書きます。もみじという植物名を指しているのではありません。

5 国民の祝日は「国民の祝日に関する法律」で決められています。国民の祝日の中には「成人の日」のように「日」の前に「の」がつくものと「元日」のように「の」がつかないものがあります。

「の」がついたり、つかなかったりするのは、なにか決まりや理由があるのでしょうか。

ア 「の」をつけないのは、歴史的に見ても社会通念上からもその日しかないと言われる特定の日であり、「の」をつけるのはそれ以外の日。

このことは法律で明文化されているわけではありませんが、不文律でそうなっているようです。「建国記念の日」は日本という国がいつ建国されたかということが歴史的にもあいまいで、国民的な合意もないので「建国記念日」としないで「の」を入れているのです。

ちなみに「の」がつかない国民の祝日は元日（年の始めの 1 月 1 日）、憲法記念日（日本国憲法の施行日）、天皇誕生日（文字通り、天皇の誕生日）の三つです。また「春分の日」や「秋分の日」は太陽が春分点や秋分点を通過する日で、かならずしも毎年同じ日になるとは限りません。



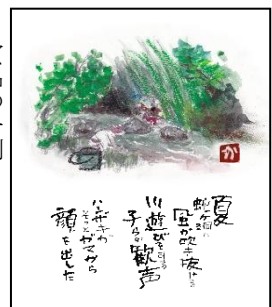
## 当選者と賞品

応募していただいたのは 15 名でした。応募者全員に参加賞として掛川の絵はがきを差し上げました。

正解者の中から次の 5 名の方々に金光さんの絵に詩（川井信一さん直筆）を添えた額装用の作品をプレゼントしました。

当選者（敬称略）：井上和子、高村伸子、中村登志子、前田愛香、水野京子

賞品の一例



会員の声  
「鮎の友釣り」

定光寺町 水野一好

水野一好さんは、現在、定光寺町の自治会長です。毎日、定光寺町のどこかを歩いてみえます。道路のゴミ拾いや地域パトロールを兼ねての散歩でしょうね。時には下半田川地区まで足を延ばされることも…。

定光寺町の青簾墓地（せれんぼち）には戒名が「釣道清磯」と刻まれた墓石があります。年代は明治で、一目で魚釣りをこよなく愛する人物像が推測できます。私も、この先輩の表現を勝手に拝借して「釣道鮎好」（ちょうどうねんこう）ってのを思案中です。何かしらあの世でも魚釣りが出来ているような夢心地気分になれる。私の今後は、忖度（笑）みたいな他人の顔色を伺うようなことをせず地域のお困り老人の如く（笑）、自分に正直に生きていたいと思っています。

ところで、友釣りの「友」という漢字から受けるこの釣りの印象は、針を付けた罎鮎（おとりあゆ）に近づいてくる友達感覚の野鮎をその針に引っ掛けることになろうかと思えます。ターゲットは違いますが、もう60年ぐらい前の話です。今ではあり得ない霞網でツグミなどを捕るためにおびき寄せさせるための鳥かご（中には捕った野鳥）を近くに設置していたのを思い出します。これこそ「友」がふさわしい猟だったと思えます。

しかし、友釣りでの実態は罎鮎を蹴散らそうとした野鮎が罎鮎の針に引っかかります。よって、鮎の友釣りという表現が間違っているのではないか、一番ぴったりするのが「鮎の排除釣り」という表現になるのではないかと考えています。

この釣りの一番の特徴は、釣った鮎を順に罎鮎として使用することにあります。つまり、罎の元気さが釣果を左右する一番の肝になります。一般的な釣りで釣果を左右する魚との接点は餌か疑似餌の類の良し悪しですので魚の口に針先がくい込んで魚を取り込めば勝負がつきます。友釣りでは、釣った鮎を手際よく元気をキープしていかに次につなげるかが釣果を左右します。この20年程の竿や細仕掛けを始めとして情報伝達手段などの進化は目まぐるしいものがありますが、釣果アップにはこれらも限界に達していると感じます。所謂、やる気のない（縄張りを持たない群れ鮎で終始する）鮎をいかに釣るか、換言すればいかに群れ鮎の闘争心を目覚めさせるかの技量が問われています。元気な野鮎を罎に使用した場合にはそれまで無反応だった状況が好転する場合があって、推測として川で遊んでいるかのような野鮎たちにやる気のスイッチが入るようです。

元気罎鮎以外に彼らの闘争心をかきたてる手法がないものかという「鮎の気持ち」を忖度（笑）するような妄想に耽ることもできて興味はつきません。



**編集後記** 本年度最後の「やまびこ」です。いつも「やまびこ」を読んでもくださる皆様、取材などで快く協力してくださる皆様、誠にありがとうございます。「やまびこ」を通して掛川の歴史や文化に触れ、いつもの景色が違って見えたり、会員の声に投稿してくださる方の人柄に心が温まったり…。人も地域も知るほどにおもしろい。そんな紙面づくりにこれからも努めます。引き続き、温かく見守ってください。よろしくお願ひします。